

によって平成七年三月に千葉県印旛村に開館された事に関係者のご尽力に深い敬意を表したい。実は最近見字をさせて戴いているが、多数の展示品に感慨深いものがあつたが、臨床検査関係の各種比色計、光度計などの診断用器械が前身の青木コレクションの目録には種々出ているがまだ展示されていないものがかなり多く残念であつた。今後は内外の関連の文献などの整備と共に医科学及び科学技術により医療と苦勞して来た進歩の跡が診断器械も含めてより整備される事を願っている。

ある種の臨床検査器械が出現するまでとその発展には、繰り返し述べているように、その検査法自体の背景の長い基礎的な研究史と開発史、医療の現場での業界との科学技術史の変遷と発展があるのであるが、まだ余り知られていない。これらの変遷の資料の収集も近代より現代への医科学史、医療史の発展の重要な柱なのである。

科学技術の進展を今後我が国では一層進める方向にあり、医療技術特に診断技術についてもこれまでの歴史的な関連の基礎的な理論に関する資料その他がより多く収集管理され、受容と発達の経緯が整理されて我が国の医科学の今後の発展への参考になればと考えるものである。

## 2

石崎 達

医史学会に入会して十年近くなりますが、私は祖父の業績を三回にわたり発表しました処、驚いたことにそのどれもが医史上空白部分をみたとになりました。

何故そうなのか、明治初期の資料は失われたものが多かったのか、その理由はわかりません。ただ医史学会の存在理由が判然としまして、それに参加できた喜びを感じております。

学会で発表される報告は私のような素人とちがつてライフワークとも思われるものが多く、学会に出席するのが楽しみになっております。

そこで私自身のことを申し上げますと、家には二百年來の蔵があつて古文書がよく保存されていた。私で八代目の医師(御典医)の家系で代々保存がよかつたことに気がましました。とすると医史学の史料の蒐集には条件に合つた医家を探して、こちらから出掛けていって資料があれば見せて戴き、写真にとつたり携帯用に新しく開発された小型のコピー器を持参して、そこでコピーさせて戴けば資料が手に入り易いのではないかと考え、そのコピー器(安い)を買入れ

ました。

地方では代々医家の家がまだ沢山ありますので、これからはそれを実行してみようと思っております。

私の家にも幕府時代、明治時代の医療器具が残っており、又処方箋(?)などもあります。ただどう整理するかが問題です。

保存について、公立の博物館に集めるのがいいと思いますが、一般的には無理です。そこで文献はコピーを大学関係の図書館に集められますが、器具はなかなか難しく、立派な蔵に保存されていけば、所在目録を作成して、時代と共に失われないようにチェックしていくのも一法ではないかと考えております。

### 3 ヨーロッパにおける概況と提言

石田 純 郎

一九九六年に考古堂から公刊した拙著『ヨーロッパ医科学史散歩』に、ヨーロッパの主要な医学史博物館、医史学研究施設および図書館について、具体的に記載した。

ドイツではほとんどすべての医科大学に医史学研究施設と図書室があり、常勤の研究者や秘書、事務職員が勤務し、医史学書、医学古書、歴史的医学雑誌、医史学雑誌が分類・保存されている。ドイツは親日的な国なので、管理者の特別な配慮で、こうした史料が予約なしに利用できることが多い。また大学・病院の各臨床科にも、関連医学史料、古医療器具、模型、解剖標本、病理標本が保存されていることがあり、日常的に廊下などのパブリック・スペースで展示されていたり、特設展が開かれたりすることがある。質の良い医史学博物館もインゴルシュタット、ハイデルベルクをはじめ、国内数か所にある。

フランスの医史学研究施設は、大学に属するものと、独立した研究施設の両者がある。ドイツと同様に、常勤研究者、事務職員がおり、図書室の併設が普通である。質の良い医史学博物館も、パリ、リヨンなどにある。また、フランスはカトリック国であり、この国の修道院は中世、前期近代期に病院棟として利用されることが多かった。そのため、一六一一八世紀を想定して復元した病院博物館が田舎に多いのがこの国の特徴である。ポーヌのオテル・デュールはその代表である。

イギリス・ロンドンの科学博物館内のウエルカム医史学